

東日本大震災 兵庫県警察の活動

～派遣警察官の体験手記～



石巻市内で交通整理に従事する交通部隊

兵庫県警察本部

兵庫県警察の取組

平成23年3月11日午後2時46分、宮城県沖で発生したマグニチュード9.0の地震は、岩手県や宮城県、そして福島県をはじめとする東日本に津波や原発事故を伴う複合災害をもたらし、1万5千人以上の方が亡くなられ、未だ3千人以上の方が行方不明になられています。

兵庫県警察では、3月11日の地震発生当日に広域緊急援助隊を派遣したのをはじめ、平成24年4月11日までに延べ約4,200人以上の職員を被災地に派遣し、被災者の救出救助、行方不明者の捜索、検視・ご遺族への対応、信号滅灯交差点での交通整理、検問、避難所・仮設住宅への巡回、パトロール、事件発生時の初動捜査など、様々な活動に取り組んできました。



【行方不明者の捜索】



【遺族対応】



【交通整理】



【避難所への巡回】



【仮設住宅への巡回】



【パトロール】

また、兵庫県内においても、被災地から避難してきた方々への支援を行うとともに、震災に便乗した犯罪に対する防犯対策や取締りの推進、白バイ支援隊「ブルーマスターズ」の結成による交通対策の推進など、後方治安対策にも万全を期してきました。



【被災者支援をテーマにしたコンサート】



【ブルーマスターズの結成】



【防犯対策チラシ】

次頁からは、本震災の災害警備に従事した本県警察職員の手記を紹介します。

警察の災害警備活動に対して、ご理解をいただければ幸いです。

「せめて一時の休息を」

機動捜査 男性警察官

平成23年4月29日、私は第4次派遣として宮城県警機動捜査隊へ派遣となった。

宮城県警機動捜査隊では、警視庁、静岡県警と共に治安維持活動に従事する事となったが、最初の顔合わせの際、今回が第4次派遣であるにもかかわらず、静岡県警のある若い係員は、既に2回目の派遣であることを知った。

私は、派遣された機動捜査隊員の中でも一際小柄なその若い係員に近付き話しかけた。もう既に2回目の派遣というのが気になったからである。

聞くところによると、その若い係員は、出身は宮城県塩釜市であり、父親も兄も宮城県警の警察官であること、しかも父親は宮城県警機動捜査隊隊員であり、その若い係員が指さした方を見ると、その若い係員とよく似た年配の小柄な刑事が机に向かっていた。

さらに私は、親族や実家の安否について尋ねると、その若い係員は「父も母も実家も大丈夫でした。」と答えた。私は一瞬安堵したが彼の次の言葉に強い衝撃を受けた。「兄も無事だったのですが、ただ兄嫁と兄の1歳の子供が未だ行方不明で見つからないのです。」と。

聞けば、彼の兄は宮城県沿岸部の駐在所に勤務しており、地震発生当時、自身は本署で勤務していたため津波による被害は免れたものの、駐在所自体は津波により流され、妻と子が行方不明になっているとのことであった。

私は彼にかける気の利いた言葉も見つからず、ただ彼と、彼の父親を呆然と見つめることしかできなかった。

孫と義理の娘を同時になくした、一際小柄な初老の刑事は、机に向かい何を思っているのか。そして、地元や家族を思い、復興のために駆けつけた目の前の若い刑事、悲しみを押し隠しつつ、警察官としての職務を全うしようとするそんな彼等の胸中を思うと胸が張り裂けそうになった。

そして、いつ終わるとも知れない2交替の激務の中で、憔悴しながらも、黙々と今自分がやるべき目の前の職務をこなす宮城県警機動捜査隊員。そんな彼らを見ていると、「せめて我々が応援に来ている間だけでも、少しでも体を休めて欲しい。今は我々に任せておけ」そう思わずにはいられなかった。

派遣当日にそのような衝撃を受けたことにより、まず瓦礫が山積みになった悪路を走り回



り、拠点となる箇所、目標物、主要幹線道路を把握した。そして、相勤者と「認知した事案は私たちですべて対応しよう」と決意し、地図とカーナビを頼りに、揉め事や不審者情報という、処理結果としてはさほど大きくはなかった事案でも真っ先に対応した。我々がいる間に少しでも、宮城県警の仲間が少しでも休めるように、宮城県の県民が少しでも安心できるようにと。

目立った事件検挙という結果を残すことができなかつたことが悔やまれるが、今自分ができる精一杯のことをやったつもりである。

しかし、帰県すると、まだ何か出来たのではないか、もっとやれたのではないかの気持ちが消えずにいる。

未だに避難所の小学校の遊具で遊ぶ幼い子供達を、頬杖をついて眺めている母親の姿が目には焼き付いて離れない。



石巻市内の被災状況

「心で感じる「絆」の大切さ」

避難者支援 女性警察官

私は東北地方が大津波により大きな被害を受けたことを中学校卒業式警戒中に知りました。

その時、付近にいた中学生が「おまわりさん、東北に行かんでええの？」と声をかけてきました。神戸の子供達は災害が発生すれば多くの支援が必要であることを知っているのです。

なぜなら17年前に発生した阪神淡路大震災を忘れない為に、現在でも震災を知らない子供達に対しても学校や地域の方が「阪神淡路大震災」の経験を語り継いでいるからです。

だからこそ子供達は東北を心配する思いやりの気持ちをもって私に「行かんでええの」と聞いて来たのだと思います。

私はそんな子供達の思いを背負い、震災が発生して約1か月後の4月に女性警察官を中心に編成された「のじぎく隊」の一員として宮城県に出動し、被災地において生活相談を通じた「心の支援」という任務に従事しました。

この「心の支援」という任務は結果が目に見える活動ではありません。

また、津波の被害が大きく警察の力では解決できないことも多く、日に日に「何が出来るのだろうか。ちゃんと出来ているのだろうか。」という思いが強くなり、避難所の方に「申し訳ない」という感情さえ生まれ始めていました。

そんな時でした。石巻市内の避難所で50代の男性と出会いました。

避難所の中で男性はイスに座り上半身を90度前に倒して顔を伏せてしまいました。

しばらくすると男性の肩が振るえはじめ、床に垂がぼたぼたと落ち始めたので、私はびっくりして男性の顔をのぞき込みました。

すると男性は顔をくしゃくしゃにし、奥歯を噛みしめながら泣いていらっしたのです。

声をかけると男性は泣きながら私に家族が8人亡くなり、財産を失い、自分がこれからどのように生きていけばよいのか分からない不安から三日三晩寝ていないことを話してくれました。

そして男性は私に「のじぎく隊が避難所に入ってきた時にこの思いを聞いてもらおうと思った。あなたに話を聞いて貰いたかった。今、あなたに話を聞いてもらって少し心の整理が出来ました。ありがとうございます」と言って自分が避難している場所に戻って行ったのです。



私はこの男性に出会うまで、何も出来ていない自分が情けなく悔しく思っていたのですが、この男性との経験により「のじぎく隊」が被災者の方の話を親身になって聞くことは、被災者の方の不安な気持ちや傷ついた心の整理をするお手伝い出来るのだと気づきました。そしてこれこそが「のじぎく隊」の支援だと確信し、その後も避難所に足を運びました。

避難所には神戸の子供達からの励ましのメッセージがたくさん届いていました。

そのメッセージを読んだ避難所の方が私に「嬉しいっちゃねー。遠い神戸の子供が東北を思ってくれてると思うと勇気が出てくるっちゃねー。」と声をかけて下さり、神戸の子供と宮城県の方との間に強い絆を感じました。

現在、私は阪神淡路大震災と、東北大震災に従事した警察官として「のじぎく隊」の経験を「命の教育～ハートスキルアップ～」と題して小中学校などで子供達に「命」と「絆」の大切さを伝えるための講演活動を行っています。

私は講演において子供達にこのようなメッセージを送っています。

『命は一人に一つしかありません。命は人類が繋いできた奇跡の証です。絆は見えません。感じるものです。人がやさしい気持ちで相手を思いやった時に絆を感じる事が出来るのです。絆は人を強くします。絆は人をやさしくします。今を一生懸命に生きてください。』



バルーンアートを使用した子どもとのふれあい

講演活動を続けることで神戸の子供達がやさしい青年に成長してくれることこそが、東北の復興に繋がると信じて、のじぎく隊での貴重な経験をこれからも子供達に伝え続けていきたいと思えます。

「震災派遣に思う」

被災地パトロール 男性警察官

まだ、冷たい風が吹く中、カツオやサンマの水揚げ漁港で有名な気仙沼漁港に立った私は、あまりの惨状を目の当たりにして言葉も出ず、呆然と立ち尽くしてしまいました。多くの家は流され基礎だけが残りに、魚の加工工場は軒並み破壊され、大きな漁船が街中にまで打ち上げられ、車という車は壁に衝突したのかと思うほど潰れ、残った道路も冠水しており、至るところが無惨な姿と化していました。「破壊」という言葉は、まさしくこの惨状のためにあるのかと思うほどだったのです。



被災地をパトロールするパトカー

今回の東日本大震災は阪神淡路大震災と違い、津波による被害が大きく、多くの方が津波に呑み込まれ、死者は約15800人と阪神淡路大震災の約2倍強という未曾有の大災害となりました。また、多くの避難者が出て、特に小さな子供の姿を見るたびに心が痛みました。

我々機動パトロール隊の現地での任務は被災地の治安維持でしたが、昼間のパトロールでは被災者が瓦礫の中で行方不明の家族を捜す姿を見るたびに、気持ちは落ち込みました。また夜間のパトロールでは、街には灯りはなく真っ暗で、車載ナビに表示される道路や建物はほとんど津波で破壊され、何処を走っているのか迷ったりもし、冠水した悪路と瓦礫の山と漂う異臭で何か不気味な感じさえしました。さらに余震が続いており、また津波が来るのではないかという恐怖心も起こりました。

そんな夜間のパトロール中、漁港の入り江付近を走行していると、車のライトの灯りの中に、一人の老女の姿が浮かび上がったのを見つけたのです。私は「まだまだ寒いこんな夜中に、誰もいないこんな瓦礫の場所で一体何をしているのだろう。まさか自殺でも？」と思い、すぐにパトカーを止めて、その老女にできるだけ穏やかな声で「こんばんは。どうかされましたか。」と質問したところ、その老女は私の声と姿を見て、少しびっくりした様子でしたが、しばらくしてボソッと「娘と孫が津波に流されて今も見つからない。家のあったこの場所で、娘と孫に早く帰ってこいと呼びかけていたんです。」と話したのです。私は何と言っているのか言葉に詰まり、とにかくこのままにしてはおけないので、この老女に「どこに避難されていますか。寒いし真っ暗で危ないからパトカーで送らしましょう。」と言いながら、老女を車内に招き入れパトカーで送ることにしたのです。車内では老女は沈黙したままで重々しい雰囲気でしたが、パトカーが避難所前まで着いたときに、老女が頭を下げながら小さな声で「ありがとう。本当は死のうかなと思ってたところでしたが、おまわりさんが声を

かけてくれたことでやめることができました。」と感謝の言葉を残し、避難所に入って行ったのです。私はその言葉を聞き、ホッとすると同時に、この老女だけでなく津波で家族を失い心が傷ついた方は他にもたくさんいることを今更ながら思い知らされ、何となく気分も沈みがちとなったのです。

しかし、次の当番日の昼間帯に他の避難所に立ち寄ったところ、パトカーの姿を見て「ワー、パトカーだ」と言いながら集まってくる子供達の元気な笑顔を見たり、多くの避難者の方々から「遠くから来てくれてありがとう。」という感謝の言葉を聞いて、私は「少しはこの派遣で役にたっているんだな」と実感することができ、多くの方々の生き様を感じ、涙してしまいました。



この震災派遣では、私は気仙沼署の方から、同僚が殉職し、自身も被災した状況の中、家族のことは後にして不眠不休で救助活動等を行っていたと言う苦労話を聞くことができました。自分がもし同じ立場に立たされた時に果たして同じような事ができるのかと考えさせられるとともに、日々想定外のことを考えて仕事をする事と、いざという時に安心して仕事ができるように家族に対しては、たとえば将来必ず来るであろう東南海沖地震などに対する備えをさせておくことが大切なのではないかと感じました。

私も派遣回数を重ね、今では派遣先も宮城県から福島県へと変わりましたが、一日も早くあの老女の心が癒えることと気仙沼をはじめとする被災地が復興することを心から願い、派遣が続くかぎり派遣先住民の安全安心のために微力ながら頑張りたいと思っています。

「私に出来ること」

交通整理 男性警察官

「言葉にならない」という表現を、よく耳にすることがあるが、想像以上の出来事を目の当たりにしたときに、比喩的に表現する言葉で、小説などでしか使われない表現だと思っていた。

しかし、私が被災地で見た現状というのは、「内陸部に打ち上げられた大型貨物船」「鉄骨しか残っていない建物」「ミニカーのように積み上げられた自動車」「見渡す限りの更地」など、まさに「絶句」するしかない惨状であった。

これが、大震災発生から半年後に被災地に赴いた、私の目に飛び込んできた風景であった。私が、被災地派遣を命ぜられたのは、9月初旬の頃で、まだまだ残暑厳しい時期であった。既に、大震災発生から半年も過ぎ、ニュースなどでも取り上げられることが少なくなり、被災地から遠く離れたところに住む私にとっては、大震災が遠い昔の出来事のように感じることもあった。

私は、第10次特別交通派遣部隊員として、岩手県釜石警察署管内への派遣を命ぜられ、そこで信号が未だ滅灯状態にある交差点での、交差点整理の任務についた。

「信号機が滅灯?」「大震災から半年も過ぎているのに?」

率直な感想であった。

私自身、阪神淡路大震災を警察官として経験し、生田警察署管内において当時交番勤務員として二交替勤務をしながら、被災地における救助活動や治安維持に従事していたが、ライフラインの復旧は比較的早かったような記憶があった。

少なくとも、半年間もの間、信号が滅灯状態であったような記憶はない。

にもかかわらず、未だ電気が通らず、復旧もままならない。なぜだ。

しかし、その答えは、意外にも早くでた。

被災地に赴いた者なら、誰しも感じたかもしれない。

「ここに、人は住んでいるのか?」「ここに、人々は戻ってこれるのか?」

見渡す限りの更地、津波により倒壊した廃墟、警察官として、何をどうすればいいのだろうと。

この惨状を、テレビや新聞を通じてしか知らない人々には、伝わりきれていないのではないか。

そんな事を思いながら交差点整理をし



石巻市内で交通整理する隊員

ていたある日、1台のバスが私の前を過ぎたところで停車した。

しばらくバスを見ていたところ、ランドセルを背負った10歳くらいの女の子が、一人降りてきて私のいる方へ向かってきた。

私が立っていた場所は、元々ガソリンスタンドがあった場所で、今は跡形もなく、唯々更地が広がっている場所である。

正直、被災地に赴いて、初めて子供を見た瞬間であった。

女の子は、私とすれ違いざま、頭をベコリと下げ、何も言葉を交わすことなく通り過ぎていった。

私の前を通り過ぎていく女の子を目で追いながら、私はしばらく呆然としていた。

「こんな幼い子供までもが、大震災を経験し、それでも一生懸命学校に通っているのかと。」そして、無意識に私は「おかえり」と大声で叫んでいた。

女の子とは、私から30メートルくらい離れていた。

すると、女の子は立ち止まり、私に振り向きながら、手を振ってくれた。

その顔を見ることは出来なかったが、体全体を使って、私に手を振ってくれていたのだけは感じ取れた。

その瞬間、私の疲労は、すべて吹き飛んでしまった。

「警察官でよかった。」「被災地に派遣されてよかった。」と思えた瞬間であった。

最後に、私の大好きな歌で「あの鐘を鳴らすのはあなた」という歌がある。

この歌を耳にすると、被災地で出会った人々、被災地でお世話になった人々の事が頭をよぎる。

「未曾有の大震災で辛い思いや悲しい別れ、苦い体験をされた方々にも、いつかは希望の光が見えてくる。たとえ町が今眠っていようとも、いつか必ず目覚めるときが来る。」

このように聞き取れてしまうのは、私だけだろうか。

この先、被災地がいつ、どのような形で復興していくかは分からないが、私は、被災地に派遣された者の一員として、しっかりと語り継いで行かなければと思う。

一人の警察官として、出来ることは限られているかもしれないが、皆の思いを一つにすることによって、その職務を全うすることが出来るんだと、改めて感じさせられた震災派遣であった。

そして、私は思う。

「あの鐘を鳴らすのは」、私たち警察官一人ひとりでなければならないと。



「勇気、気力、そして誇り」

行方不明者捜索 男性警察官

「いつでも東北に出動できる準備をしておくこと。」上司からの最初の指示である。

私は異動を控えており、内示が発令された翌日に震災が発生した。テレビでは未だかつて見たことのない惨状が映し出され、日を追うごとに死者、行方不明者の数が増していく。

私は管区機動隊に配置となった。「一日でも早く現地で活動がしたい。」そう思いながら資機材、食料、日用品等が満杯に積み込まれた車で走ること丸二日、今回の震災で最も甚大な被害を受けた地域の一つで、海沿いにある宮城県石巻市及び牡鹿半島に派遣された。

ライフライン、道路が完全に寸断された現地は発生から一週間が過ぎていたが、まだ冬の真っ只中でとても寒かったことを覚えている。石巻市内は車、家屋、店舗等何もかもが跡形も無く押し流され、震災以前の町の姿は想像もつかない。壊滅した町でコンクリート製の頑丈な建物だけがかろうじて残っていた。道路の両端に瓦礫が山積され、道路はデコボコ、車が通る度に打ち上げられてきた砂がまき上がり視界が奪われる状況で、車で移動するのもやっとのことだった。道の周囲には着の身着のままの格好の人々が、家の後片付け、食糧、水の配給待ち、近所の家々の安否確認のために行き来していた。見かけた人々は、これほどの被害を受けながらも決して絶望的な表情をせず、むしろ前向きに普段どおりの顔をされていたように見えたのが印象的だった。

私たちに課せられた任務は行方不明者の捜索。どこで何人が行方不明になっているか見当も付かない。海岸沿いの現場では打ち上げられた瓦礫の中に人の手らしきものは見えないか、倒壊した家屋では中に人が埋まっているか、とにかく見える範囲には全て目を向け、目に付いたものは全て手に取り、「ここには誰もいない」と納得がいくまで捜すよう心がけ、隊員にもそう指示



した。しかし、瓦礫の山は想像以上に膨大で、人間の力ではとても太刀打ちできない物も多いうえ、地表まで見渡せる場所も少なく、捜索は難航し、時間だけが過ぎていった。自然の前では人間の力など微々たるものだと痛感させられた。使命感に燃えていた自分が小さくも思えた。ある日の捜索で、一階部分が潰され二階部分だけが残った家屋があった。私は連日の捜索で疲労がたまり、どうすることも出来ない瓦礫を前に、現地入りした時に抱いたかつてないほどの使命感も打ち碎かれそうになっていた。瓦を全て取り除き、天井部分をエンジンカッターでこじ開けて中に入り、ばらばらになった柱、梁、家具を引っ張り出して家の中

を捜した。残念ながら発見には至らず、午前中の作業を終えた。

そして休憩のため駐車場所に戻ろうとした時のことである。家屋のそばに数人の人が立っており、私達が前を通り過ぎようとした際、その人たちは私達に向かって帽子を脱ぎ、手を合わせ、深々と頭を下げたのだ。私の目から自然と涙がこぼれた。力になりたいという気持ちとは裏腹に、行方不明者を発見することが出来なかった悔しき、歯痒さがこみ上げ、そして何よりこの人達はきっと「どうか見つけてほしい」と祈るような気持ちで私達の作業を見ていたのだろうと思うと、涙が止まらなかった。敬礼で応ずることすら出来なかった。私は休憩中その光景を思い出しながら、「自分は最後まで絶対に諦めない」、「納得いくまで捜させてくれ」、「一人でも多くの方を家族のもとへ返す」と何度も自分に言い聞かせた。「そこまでしてくれたんだったら、もういいよ」と言ってもらえるまで。

涙はいつしか『勇気、気力』へと変わった。過去に経験したことのない出来事であった。

どれだけ貢献出来たかは別として、瓦礫の他にも粉塵による健康被害、余震、津波の再来等の恐怖と闘いながら我々は任務を終えた訳だが、忘れてはならないのがこの震災で殉職、行方不明となった警察官が多数いることだ。悪夢のような状況の中、警察官として押し迫る津波を背に避難する住民の最後尾で任務についていたのだろう。まさに命がけだ。その貴い犠牲によってどれだけ多くの命が救われただろうか、その活動に対し心から敬意を表したい。

父、夫、子、残されたご家族の方々には、かくも勇敢に津波に立ち向かった警察官が家族にいたことを誇りに思っていたきたい。

今後、被災地で得た『勇気、気力』を一生の宝とし、後輩達にこの経験を伝承していきたい。そして被災地で活動した経験を『誇り』に思い、偶然にも震災の年に生まれた我が子にも父が警察官であることを『誇り』に思ってもらえるよう今後の警察人生を歩んでいきたい。



原発20km圏内での捜索活動

「自分たちにできること」

遺族対応 男性警察官

3月11日、巨大な津波に家具や車、家までもが飲まれる映像を目の当たりにし、これまで自分が経験したこともない大規模な災害出動になる、そう思いすぐに部隊全員で出動の準備にかかったが、私は一瞬、この惨状を目の前にして自分は一体何が出来るのだろうかという不安に駆られた。それでも、何とかしてここにいる人たちを助けなければならないという思いだけは揺るがなかった。おそらく私だけではなく、部隊の誰もがそう思っていただろう。

その日の夕方、本県の広域緊急援助隊が真っ先に現地へ向かったという知らせを聞いた。災害発生からたった数十分という、そのあまりの早さに頼もしさ、崇高なものを感じた。派遣された部隊には自分もよく知る同期がいる。「頑張っただけ」という期待と同時に、「先を越された」という悔しさのような感情も込み上げた。「次は自分たちの番だ、あれこれ考えていても仕方ない、その時出来るだけのことをしよう」と私は自分の心に誓った。

3月19日、私達の部隊は被災地へ向かった。活動場所は宮城県石巻市の遺体安置所である。そこで私達に与えられた任務は、ご遺族の方にご遺体をお返しすること、運ばれてきたご遺体を安置することだった。年老いた親を亡くした夫婦、妻子を亡くした夫、我が子を失った親など毎日何百人というご遺族の方々がそこを訪れた。私達は、行方不明の家族や知り合いを探しに来られた方を身元不明遺体が安置されている場所まで案内したり、家族のご遺体を引き取りに来られた方に書類を渡し、手続きについて説明した。どんな内容であれ被災者の役に立てることなら進んで事にあたろうと臨んだが、ご遺族の方をご遺体に合わせる仕事はあまりにも気が重く、初めのうちは何を話せばいいか分からず戸惑った。親しい人を突如失ったご遺族の方に向けられる言葉など見つかるはずがなく、私は、幸せな家族を持つ自分が申し訳ないような気持ちになっていた。

私達は活動現場から少し離れた場所にある体育館で寝泊りさせてもらった。食事は持ってきた非常食を食べ、夜は冬の厳しい寒さが残る中、毛布を敷き寝袋にくるまって眠った。衣食住どれも厳しい環境下ではあったが、辛いなどという感情は、おこがましくて持てなかった。私達の置かれていた境遇は、被災者の方々に比べあまりにも恵まれ過ぎていると思ったからだ。

変わり果てた家族と対面し、泣き崩れるご遺族の横で、私は涙を流すのを必死で堪えた。私は、警察官なのだからここで泣いてはいけない、そんな立場ではないと自分に言い聞かせ、涙が込み上げてくるのを上を向いて必死に堪えた。

私達がそうした作業をしている間にも、捜索部隊が毛布に包まれたご遺体を次々と安置所へ運んで来た。彼らは運んで来たご遺体を降ろしては現場へ捜索に出かけ、新たなご遺体を発見し、それを運んで来てはまた捜索へ出かけていった。そのため、初めは数百体あったご

遺体の数は日が経つにつれ増えていき、やがて千体を越えた。自衛隊の他、他府県の機動隊や消防隊、海外の応援部隊も捜索活動にあたっていた。皆、それぞれ所属は違うけれど同じ目的をもって東北に集まってきたのだ。そう思うと不思議と親近感が生まれ、自分達も負けていけない、一緒に頑張らなければという気持ちが沸いてきた。彼らが見つけてきてくれたご遺体を無事にご遺族のもとへお返しすること、それが今の自分に出来る唯一にして全ての職務だと思った。それは絶対に疎かに出来ない職務だった。

やがて現地での活動期間が終わり、まだまだやるべき仕事を残したまま私達は帰県することになった。私達が帰ってしまった大丈夫なのかと思ったが、道中で、様々な部隊や自治体の車両と何度もすれ違っていったことを思い出し、志を同じくする者が日本中にいることを心強く思いながら現地を後にした。

この出動において、私達が被災地で残してきた行動、言葉そのどれであれ、少しでも被災地の方々の役に立つことがあったのならば、私はそれを誇りに思いたい。



石巻市内で捜索する隊員



派遣部隊を応援する地元の皆さん

「半径20キロメートル」

福島第一原発警戒区域立入規制 男性警察官

私が福島県に派遣されることが決定したのは平成23年7月末のことである。

私自身、東日本大震災の発生から2度派遣され、行方不明者の捜索活動等に当たったが、今回の任務は「原発20キロメートル規制にかかる検問業務」というものだった。

福島県にある福島第一原子力発電所から20キロメートルに設定された避難対象地域、この範囲内に入り出す車両の検問に当たるというのがその内容である。



警戒区域立入規制を行う隊員

当初は放射線に対する知識も無く、またニュースや新聞では原発の事故が国際的に取り上げられていたこともあり、目に見えない放射線というものへの不安を感じたが、だからこそ震災支援活動として大切な業務であるのだと考えた。

機動隊の輸送車両で福島県に向かう途中、過去二度の災害派遣で目の当たりにした悲惨な光景が幾度も頭の中に浮かんだが、いざ活動場所に到着した時、目の前に広がっていたのは記憶の中にある瓦礫の山ではなく、広大な農地であった。

検問場所から辺りを見渡した時、視界に入っているすべてが規制範囲なのだ気付き、その規模の大きさに驚嘆した。そして、今日に映る山々の遙か向こう側までもはや誰一人住んでいないということに、得体の知れない恐怖を感じたのが記憶に残っている。

そんな中、部隊の引き継ぎが終わり、検問が開始された。検問の内容は、市役所が発行した通行許可証を確認し、持ち出し物品等の検査をして通行させるというものであったが、8月の炎天下、気温は35度を超え、設置していた熱中症の危険を示す装置からはアラームが鳴り続けるというとても過酷な環境であった。

しかし、検問場所の前で献花され、涙ながらに手を合わせる被災者の方を目にすると、過去派遣された岩手県や宮城県が思い出され、頑張ろう、と胸が熱くなった。

通過する車両は、原発の方向に向かう電力会社の車や工事車両が多いが、一般の車両は、避難する際に実家に置いてきた車や家財道具を運びだそうとする目的の方が多く、中には持ち出し禁止物品にあたる食べ物や飼い犬等を車に隠して出ようとする人がある。

そういった人には、持ち出し出来ないことを教示して引き返してもらうことになるのだが、住民の方々の事情を考えると、仕方がないとはいえ苦々しい気持ちになった。

地震による恐怖と被害、そして放射性物質による恐怖、汚染食物に対する恐怖、そして住

む土地を離れいつ帰れるかわからないという不安。

自分がその状況下に置かれたとしたら、その辛さはどれほどか想像すると、「通してほしい」という住民の方々の気持ちが伝わってくるのだった。

実際に、米袋を隠して持ちだそうとしていた住民と揉めることもあった。

「原発事故の前に出来た米です、食べ物が無いと生活出来ない」と言われ、1時間以上も説得が続き、結果的に運び出しを諦め引き返して頂いたが、涙ながらに訴える姿からは避難生活の困難さが伝わってきた。

現地で会う人はほとんどが被災者である。今回の検問についても、通行を求める人は被災者であるということを念頭に置き、規制する理由や条件、迂回路等について正しく説明し、相手に納得してもらえるよう努めなければならないと感じた。

私の派遣期間は2週間程で終了したが、福島では未だ20キロメートルの通行規制は解かれてはいない。現在でも、交代で各県の警察官が検問を行っているのである。

漏出した放射性物質の処理、避難所の運営管理、破壊された原子力発電所の修復作業等、各関係機関がそれぞれの役割を懸命に果たしている。

一人の警察官として関われることはその被害に対して微かなものかもしれないが、組織の担う役割を一生懸命に果たし、積み重ねていくことで、被災地に生きる人たちを応援し、少しでも力になれるようこれからも努力していきたい。



夜間規制を行う隊員

「悲しみを支えられるか？」

被災地集団パトロール 男性警察官

平成7年1月17日阪神淡路大震災を、警察官として経験した私は、東日本大震災の出動要員の一人として名乗りを上げました。

阪神淡路大震災の時は、地震を体感・体験し、職場に向かう途中に見た長田区の火の手で、地震の大きさに恐怖を感じ、現地では手の付けられない状態の中、もがきながら徹夜の救助活動に従事しました。一段落した私に待っていたものは、900世帯にも上る仮設住宅の担当だったのです。仮設住宅の居住者は家を失い、家族を失い、途方に暮れる人々の集まりでした。巡回連絡では、家族構成等を聴取、被災体験を聞き、困り事に耳を傾けましたが、自分自身が地震体験していたので、さほど重々しい気持ちにはならなかったように思います。

今回は宮城県岩沼警察署に約1か月派遣されましたが、管区機動隊・機動隊の経験を持つ私でも、24時間二交替制勤務であり、体調管理には苦勞しました。

派遣先では、仮設住宅を巡回し住民要望を把握することと、夜間の街頭防犯パトロールが任務でしたが、被災地の現状を目の当たりにして、震災の悲惨さがひしひしと伝わってきたのです。仮設住民の声を聞く内にそれは益々強く感じられました。

仮設住宅では、環境が変わり体調を崩す高齢者や、家族離れ離れの生活を余儀なくされた子供がいました。被災者は口々に「地震は大したことはなかったが、あの津波は恐ろしかった。」と話すのです。その表情に恐怖心は表れていませんでしたが、皆が心の奥に強く刻んでいたに違いありません。その一つが、ある母親の話です。その母親は表情も変えず、その体験をこんな風に話してくれました。

「娘の中学校卒業式の日で、式を終えて公民館で謝恩会を開こうとしていた時、地震が起きました。津波警報が出たので、娘と自宅に帰り高齢の母・愛犬を車に乗せ避難している途中、遠くの海側から黒ずんだ津波が後を追ってくるのを見たのです。難を逃れた後、中学校に残り後片付けをしていた息子のことが心配になり探したのです



パトロールカード

ここに写し、巡回警察官に添付されている
兵庫県警の

で、

月 日 年 前・午後 時 分 分

赤電の巡回をパトロールしました。
 異変はありませんでした。

不審な人を見かけたら、119番又は下記の連絡先へ
連絡先

配布者



が見つからず、学校近くで遺体として発見されました。あの時、私が学校に息子を迎えに行き、さえいれば、助かったのだらうと思っています。」という話でした。私ですら話を聞きながら目が潤む思いだったのですが、彼女は涙一つ見せなかったのです。震災から3か月が経っていたので、心の整理が出来掛けている時期であろうと思われるかも知れませんが、その歩く姿、仕事に就こうとしない無気力さを見た私には、心の痛みは計り知れないくらい大きいものになっているのだらうと感じられました。これが俗に言うPTSD（心的外傷後ストレス障害）なんだと痛感させられました。

被災者に対して私達に出来る事は、話し相手になり、ただただ話を聞いてあげることだけでなく、無力さを感じていたのですが、あまり外出しない高齢者を訪問した際、訪問する度に笑顔で温かく迎え入れてくれた姿を見て、自分たちのやることが見つかった思いがしました。

1か月もすればこの地を離れる私達に何か出来ることはないか、結果として残していけるものはないかと考え、「住民の輪を創る」ことをテーマに活動し始めたのです。幸いにも



仮設住宅集会所にはボランティアが詰めて多彩な活動をしていたので、ボランティアを支援し、「集会所に集まりみんなで話をしよう。」と全世帯をまわって提唱しました。当初は怪訝な顔をしていた人も、顔を見る度に明るく微笑み話し掛けてくれるようになっていきました。

家に引きこもりがちの人も、声掛け一つで笑顔になり参加者も増えた時、こんな事でも役に立つのだと感じました。

現地を後にする私達は、ほんの少しでも被災者の役に立てたのだと胸を張って帰県しましたが、被災者にはまだまだ計り知れない傷跡が残っているに違いありません。今後も思いだけでも支援し続けたいと思っています。

東日本大震災 兵庫県警察の活動
～ 派遣警察官の体験手記 ～

平成24年4月発行

編集及び発行責任者 兵庫県警察東北地方太平洋沖地震対策室長
(兵庫県警察本部警備部災害対策課長)

編集員 兵庫県警察東北地方太平洋沖地震対策室員

本書の無断複製・転載を禁じます。